第二次世界大戦の記憶と終末をめぐる想像力

小林　亜希

１．問題の所在と目的

1950 年代のイギリスでは、*The Day of the Triffids* (1951)、*Lord of the Flies* (1954)、*On the Beach* (1957) 等、冷戦期における核戦争の脅威を描いた終末小説 (Apocalyptic fiction) が流行した。1950 年代にあって核戦争のイメージは人口に膾炙したものであり、第二次世界大戦の記憶も冷めやらぬ状況下での冷戦は、人々に第三次世界大戦勃発の恐怖を与えたであろうことは想像に難くない。しかし、1960 年代以降、人々が抱く核戦争への恐怖は次第に低下していった。Weart は心理学者ロバート・フリーマンやバートランド・ラッセルの言説に言及しながら、当時の人々が核イメージに対して次第に「否認」ないしは「麻痺」するようになったことを指摘している(Weart 2012: 152-57)。このような状況下で、ウィリアム・ゴールディング (William Golding, 1911-1993) は 1940 年代から 1970 年代までのイギリスの社会状況を包摂する、ある種の終末小説『可視の闇』(*Darkness Visible,* 1979）を上梓した。当該小説は、第二次世界大戦におけるロンドン大空襲 (The Blitz) の描写から始まり､イギリスによるオーストラリアでの核実験や IRA を連想させるテロ事件の顛末が寓話的に描かれている。本報告では、『可視の闇』の分析を通して、第二次世界大戦の記憶が薄れ、核イメージが忘却されつつあった 1970 年代に、大戦から冷戦期までの記憶がどのように表象され、終末をめぐる想像力を生み出しているかを論じた。

２．ロンドン大空襲の記憶／オーストラリアの核実験／社会の分断と移民の表象

4 万 3000 人以上の民間人が死亡したとされるロンドン大空襲 (1940-41) は、当然ながらナチス・ドイツによる戦争被害の記憶として語られることが多い。しかながら、第一部冒頭では、空襲の炎が “the burning bush” (4) に見立てられ、“semi-precious stones” (6)という表現が用いられていることからも、空襲の惨状が聖書や『失楽園』のアリュージョンと結びつき、世界の終末として描かれていることは明らかである。一方で、Crawford も指摘しているように、その炎にホロコーストを読み取り、火中から登場するマティ (Matty) の描写にベトナム戦争時に有名になった少女キムフックの写真を想起することも決して牽強付会な解釈ではない(Crawford 2002: 154-55)。火傷で左右に分裂したマティの顔は、被害者としての子どもと加害者としての人類の罪過を二重に象徴しているようにも思われるのである。当該物語で語られるロンドン大空襲の記憶は、戦争被害者としての記憶と加害者としての記憶の二面性を包摂するものとして表象されていると言えるだろう。

加害／被害の二面性は、オーストラリアを放浪するマティのエピソードにおいても再現表象されている。マティはダーウィン郊外の砂漠でアボリジニのハリー・バマー (Harry Boomer) に出会い、地面に磔にされた挙句、空中からジャンプされて股間を傷つけられる(88-89)。ここで仄めかされているのは 1956 年にイギリスがオーストラリアの協力を得て行ったマラリンガの核実験である(Crawford 2002: 155)。小林は以前に当該箇所をイギリスの歴史的犯罪行為が隠匿され虚構化されるプロセスとして論じているが(小林 2009: 10-16)、本報告で問題にしたいのは、核実験の被害者であったはずのアボリジニが加害者になり、マティが被害者として描かれていることである。いわば、加害者と被害者が逆転することにより、マティは被害者の記憶を象徴的に追体験し、「自分は何者なのか」(94) という問いを一層深めていくことになる。ところが、同時期にロンドン近郊の町グリーンフィールドの人々に記憶されていたのはベビーカーの消失事件であり、人々はその事件の犯人を小児性愛者のペディグリー (Pedigree) であると断定する(119-21)。このように、イギリスの人々のあいだに形成される集団的記憶において、核実験における加害の記憶は共有されることもなければ、表象されることもないのである。

加害者と被害者が逆転する構造は、第二部と第三部を通して継続される。第二部は主に少女ソーフィ (Sophy) のサディスティックな欲望が露悪的に語られるが、第三部では双子の妹トーニ (Toni) によって計画されたテロリズムにソーフィが利用されていたことが明らかになる。ソーフィが利用したと信じていた仲間たちはトーニと飛行機をハイジャックして国外逃亡するのであり、第二部で詳述されるソーフィの加害者としての欲望は利用され、ソーフィはたちまち被害者へと反転してしまう。第三部に入ると、1970 年代におけるイギリス社会の分断が本屋シム・グッドチャイルド (Sim Goodchild) の眼差しを通して前景化する。特に着目し

たいのは、1970 年代に増加したとされる南アジア系移民、特にパキスタン系移民の表象である。第三部では移民たちが町を闊歩する様子が描かれ、移民を本国へ送還することを主張する右翼団体 “Front” の存在も浮かび上がる(304)。しかし、ここで強調されているのは、多様化しつつある社会への戸惑いであり、移民たちの表象はあくまでも理解不能なモブとしての他者に留まっている。シムとエドウィン (Edwin) はマティとの交霊会を通して、分断した社会を一つに回復したいというユートピア的願望を抱いているが、移民たちが排除の対象になっていることには無頓着だと言わざるをえない。移民たちは第一部に登場するアボリジニと同様に、抵抗する声を持たない弱者として表象されているのである。

最終的に、交霊会の様子はテロを警戒する諜報機関により密かに録画されていたことが明らかになり、テレビのニュース映像として編集され、繰り返し放送されることになる。映像の拡散によってシムたちの行動は嘲笑の的になるが、シムはマティの日記が発見されたことに希望を見出す(393)。編集された映像によって人々に流布された偽りの記録に対して、マティの日記だけが真実を担保する可能性を僅かに残すことになるのである。ここに、集団的記憶に対するささやかな抵抗を読み取ることができるかもしれない。

３．まとめに代えて

冒頭部で描かれる被害と加害の記憶を包摂した第二次大戦におけるロンドン大空襲の記憶は、かたちをかえて反復的に再現表象されているように思われる。『可視の闇』で描かれるのは、イギリスが自らの加害性を忘却し外部に排除することによって、集団的記憶を形成していく過程だったのではないか。その過程において、一見して加害者に思えるペディグリーやソーフィもスケープゴートとして利用され、たちまち被害者の立場へと反転する。そのとき、アボリジニ、南アジア系移民といった社会的弱者の存在は後景化されてしまうのである。また、かつての被害者が加害者になり、加害者が被害者になる過程は、1970 年代に存在感を強めていく IRA を初めとするテロリズムの論理とも通底している。冒頭で描かれた第二次世界大戦下のアポカリプス的状況は、核戦争の危機が人々に忘却された後も絶えず継続しているのであり、アレンカ・ジュパンチッチの言葉を借りるなら、この世界が「アポカリプスの内部に位置づけられている」(Zupančič 2020: 79) ことを想起させる。『可視の闇』は 1940 年代から 1970 年代までの終わることのないアポカリプスを描いた小説であり、加害者と被害者が絶えず転倒する国民国家のアレゴリーとして読むことができるのではないか。

引用・参考文献

Aldiss, Brian. *Billion Year Spree: The History of Science Fiction*. Weidenfeld & Nicolson, 1973.

Carey, John. *William Golding: The Man Who Wrote Lord of the Flies*. London: Faber and Faber, 2009.

Crawford, Paul. *Politics and History in William Golding: The World Turned Upside Down*. U of Missouri P, 2002.

Golding, William. *Darkness Visible*. Faber and Faber, 2013.［吉田徹夫・宮原一成他訳『可視の闇』開文社出版，2000 年。］

Kristine A. Miller. *British literature of the Blitz: Fighting the People's War*. Palgrave Macmillan, 2008.

Panayi, Panikos. *An Immigration History of Britain: Multicultural Racism since 1800*. Routledge, 2010. [浜井祐三子・溝上宏美訳『近現代イギリス移民の歴史−寛容と排除にゆれた二〇〇年の歩み』人文書院，2016 年。]

Rothberg, Michael. *The Implicated Subject: Beyond Victims and Perpetrators*. Stanford UP, 2019.

Tiger, Virgina. *William Golding: The Unmoved Target*. Marion Boyars, 2003.

Weart, R. Spencer. *The Rise of Nuclear Fear*. Harvard UP, 2012. [山本昭宏訳『核の恐怖全史』人文書院，2017 年。]

Whitehead, Anne. *Memory*. Routledge, 2008. [三村尚央訳『記憶をめぐる人文学』彩流社，2017 年。]

Zupančič, Alenka. “The Apocalypse Is (Still) Disappointing” *S: Journal of the Circle for Lacanian Ideology Critique*, 10＆11(2017-2018). pp.16-18.
https://www.lineofbeauty.org/index.php/S/article/view/82/101 [高山花子・高村峰生訳「アポカリプスは（いまなお）失望させる？」『表象』14，表象文化論学会，月曜社，2020 年。]

アスマン，アライダ．安川晴基訳『想起の文化—忘却から対話へ』岩波書店，2019 年。

小林亜希．「ヘテロトピアとしての対蹠地—*Darkness Visible* (1979) における空間表象」『東北』第 42 号，東北学院大学大学院文学研究科，2009 年。pp.1-19.

三村尚央．『記憶と人文学—忘却から身体・場所・もの語り、そして再構築へ』高梨遊書房, 2021 年。